

パリだより：ユネスコ日本大使からの手紙（第13号）

「秋のユネスコ執行委員会」

2025年10月27日

ユネスコ日本大使の加納です。

10月のパリは寒い日が多くなりましたが、秋晴れの清々しい日も時折あります。

毎年10月の第1日曜日には、競馬の凱旋門賞レース（G1）がロンシャン競馬場で行われます。2008年から同賞のスポンサーになっているカタールの招待により、何人かの同僚大使と共にロンシャン競馬場を訪れました。翌日から始まるユネスコ執行委員会の準備のため、残念ながら凱旋門賞レースを観ることはできませんでしたが、爽やかな秋晴れの下、いくつかのレースを観戦するのは気持ちの良いものでした。



凱旋門賞レースが行われたロンシャン競馬場

今回は、10月前半に行われた、秋のユネスコ執行委員会についてご紹介します。

（ユネスコ事務局長指名選挙）

今回の執行委員会の最大の注目点は、10月6日の執行委員会で行われた、アズレー事務局長の後任となる次期事務局長の指名選挙でした。

本年１１月に任期を終えるアズレー事務局長の後任事務局長を選ぶ手続きは、本年３月に候補者届出を締め切った後から始まり、４月の春の執行委員会に３人の候補者、すなわち、エジプトのハリード・エル・アナーニー候補、メキシコのガブリエラ・ラモス候補、コンゴ共和国のフィルミン・マトコ候補を招き、執行委員国メンバーと各候補者との間で意見交換を行いました。その後、各候補者は世界各国を巡って選挙活動を繰り広げてきました。

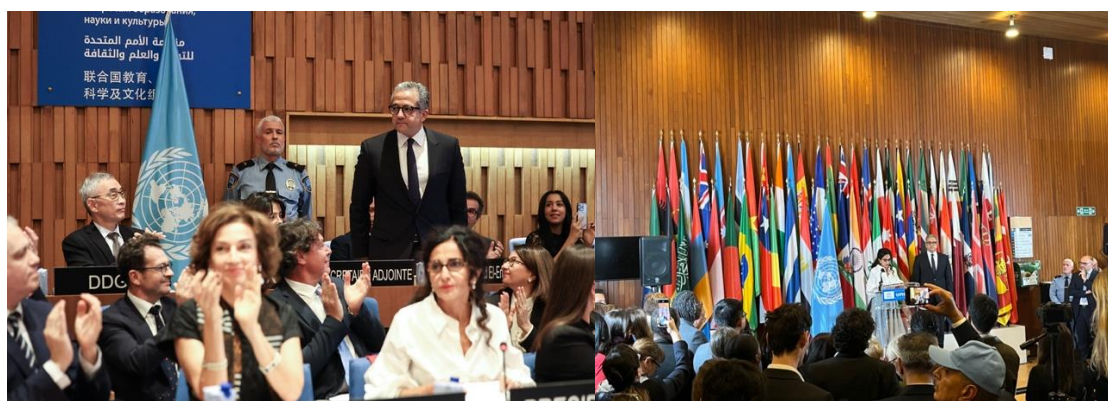
ユネスコ憲章によれば、事務局長は執行委員会で指名(nominate)され、総会で任命(appoint)されることになっています。これまで執行委員会で指名された候補者がいずれもそのまま総会で任命されていますので、執行委員会で指名されることが実質的に事務局長を選ぶことになります。

執行委員会での指名選挙は５８カ国の委員国による秘密投票で行われ、単純過半数（３０カ国）の支持を獲得した候補が指名されます。いずれの候補者も過半数を獲得できない場合は、最下位の候補者を除いて投票を繰り返し、いずれかの候補者が過半数を獲得するまで続けられます。４回目の投票でも過半数が得られない場合は上位１、２位の候補者で５回目の投票（決選投票）を行って決めることになります。２０１７年にアズレー事務局長が選出された時は、候補者が乱立したため、この５回目の投票までもつれ込みました。

今回は、当初から候補者は３名であり、かつ、途中でメキシコのラモス候補が立候補を取り下げたため、６日の指名選挙はエジプトのエル・アナーニー候補とコンゴ共和国のマトコ候補で争われることになりました。この日は執行委員会プレナリー（全体会合）初日で、各国のナショナル・ステートメントが行われる日でしたが、エジプト、コンゴ共和国の両国とも外務大臣が乗り込んで、事実上の自国候補の応援演説となるステートメントを行っていました。

選挙は６日の公開日程が終わった後の夕刻、執行委員国代表のみが参加する非公開の形で行われました。執行委員会会議場の円形に並ぶ委員国席の真ん中のスペースに二つの仮設ブースが設けられ、国名を呼ばれた順に各国代表が足を運び、候補者の名前が記載された投票用紙を受け取り、ブースの中で支持する候補にチェック、封をした上で投票箱に入れます。全ての投票が終わったら、開票作業を同じ場所で行い、指名されたテラー役を務める大使が１枚ずつ投票用紙をスクリーンに映し出し、全執行委員国が見守る中で票数を数えています。今回は、執行委員国５８カ国のうち、米国は欠席していたので、５７カ国が参加しました。単純過半数の票数は２９票ということになります。

開票の結果は、エル・アナーニー候補が55票、マトコ候補が2票で、エル・アナーニー候補の圧勝でした。開票結果を執行委員会議長が告げ、別室で待機していたエル・アナーニー候補が呼び込まれると会場に大きな拍手が湧き、執行委員会議長、アズレー事務局長、総会議長がそれぞれ祝辞を述べた後、同候補が挨拶。次いで選挙戦を戦ったエジプト、コンゴ共和国、メキシコの代表がそれぞれ挨拶を行いました。一連の手続き終了後は、議場外で執行委員会議長とエル・アナーニー候補による記者会見が行われました。



次期ユネスコ事務局長に指名されたエル・アナーニー氏（出典：ユネスコ）

正式な任命は11月のユネスコ総会を待つ必要があるものの、これで実質的な区切りがついたといえ、今後はエル・アナーニ次期事務局長がどのような体制を整えてユネスコの舵取りを行なっていくかが注目点となります。

（ユネスコ総会議長指名選挙）

事務局長指名選挙の翌日、10月7日にはもう一つの選挙、総会議長指名選挙が行われました。これは私が当事者となった選挙です。

ユネスコにおける主要ポストとして事務局長の他に執行委員会議長、総会議長があります。事務局はユネスコの日々の業務を行い、年2回開催される執行委員会は加盟国の立場から事務局の活動を監督、2年に1回開催され、全加盟国が出席する総会は予算、人事等の決定を行う最高意思決定機関として、それぞれ役割分担があります。事務局長が任期4年（最大2期）で加盟国が推薦する候補の中から執行委員会での指名を経て選ばれるのに対し、執行委員会議長、総会議長はそれぞれ任期2年でいずれも地域グループの持ち回りが慣例と

なっています。グループ内で統一候補が調整されればそのままコンセンサスで選ばれますが、複数の候補で調整がつかない場合は、執行委員会で指名選挙を行うことになります。

今回、次の執行委員会議長はアラブ・グループから、総会議長はアジア太平洋グループから選ばれる順番です。執行委員会議長はカタールが統一候補となりましたが、総会議長の方はアジア太平洋グループから本年2月に日本の他、インド、韓国、バングラデシュの4人の大使が相次いで立候補するという混戦模様となりました。その後、8月に韓国、9月にインドの大使がそれぞれ立候補を取り下げたのですが、日本の私とバングラデシュの大使が最後まで残り、10月7日の指名選挙を迎えることになったわけです。

国連における最大の途上国グループ（G77）やイスラム協力機構（OIC）のメンバーでありグローバル・サウス諸国との関係が深いバングラデシュは、国連における選挙強者として知られています。国連安保理非常任理事国選挙で日本が唯一敗れたのがバングラデシュと争った1978年の選挙の時でした。また、現在バングラデシュの暫定政府首相を務めるモハマド・ユヌス氏は、マイクロ・ファイナンスを行うグラミン銀行の創始者としてノーベル平和賞も受賞した人物で、国際的にも知名度の高いリーダーです。当地のバングラデシュ大使もパリやニューヨークでのマルチ外交の経験の長いベテラン外交官で、手強い相手でした。



6日の全体会でナショナル・ステートメントを行う筆者

もっとも、私の方も、日本が１９５１年の加盟以来７５年にわたり一貫してユネスコを支えてきた実績、とりわけ、最近のウクライナ、ガザにおける教育等での支援や、文化、防災でのアフリカ、小島嶼開発途上国（ＳＩＤＳ）への支援を踏まえた各国の反応から、かなりの手応えを感じていました。投票前日の６日に行なったナショナル・ステートメントでも、総会議長として一層の貢献を行う用意がある点を強調しました。

そして投票を迎えたのが７日の午後２時。投開票は、前日に行われた事務局長選挙と同じ形式で行われました。

執行委員国５８カ国のうち欠席した米国を除く５７カ国が投票を終えた後、直ちに開票が行われます。５７枚の投票用紙が１枚ずつスクリーンに映し出されていくので、どちらの候補に投票されているかを確認しながら全執行委員国代表が得票数をカウントしていきます。

最初バングラデシュの得票が先行しましたが日本が追いつき、各国が固唾を呑んで見守る中で開票が進み、一進一退の状況が続きました。最終的に、バングラデシュが過半数の票を獲得しました。エジプト候補の圧勝でお祭り騒ぎのようになった前日の事務局長選挙と異なり、最後まで静かで、かつ緊迫した選挙戦でした。

終了後、多くの大使が私のところに握手を求めて健闘を讃えてくれました。議場外にいた委員国でない大使の中には、私のところに人々が長蛇の列をなしているのを見て私が当選したものと勘違いし「お祝い」に来てくれた人もいたほどです。また、バングラデシュ大使とも握手を交わしました。厳しい選挙戦でしたが、共にユネスコを支える同僚大使であり、友人でもあります。

もっとも、健闘、惜敗とはいえ敗北は敗北です。今回の選挙結果の敗因をしっかりと分析し、将来の教訓としたいと思います。

（米国脱退後のユネスコ予算を巡る議論）

今回の執行委員会では、上記の２つの選挙の他にも、次の会計年度（２０２６年／２７年）の予算をどうするかが、特に米国の脱退表明の影響との関係で、大きな争点になりました。

今年７月に米国はユネスコ脱退を表明しましたが、ユネスコ憲章上その効力

が発生するのは来年２０２６年の年末であり、２０２５年、２０２６年の分担金の支払義務があります。１年分が約７５００万米ドルです。しかしながら、実際上は米国は脱退表明後はこの分担金の支払について、またユネスコ関連の会議への出席も拒んでいます。このため、現会計年度（２０２４年／２５年）は当初予算を下回る形で執行抑制を余儀なくされている状況です。

今回、一番の争点になったのは、次期会計年度（２０２６年／２７年）の通常予算シーリングをどうするかでした。予算シーリングは当該期間中の加盟国数をベースに決めるため、２０２６年分について米国分の分担金を込みにして（実際に支払われるかは別問題）、２０２７年分はそれを除いて設定するのが論理的です。ただ、予算を減額設定するのはどの組織にも抵抗感があります。他方で、米国の抜けた穴を埋め合わせるとするのは各国とも受け入れ難く、またインフレ要因をどう考慮するかとの論点もありました。

この問題については、執行委員会が始まる数週間前から、日本も含む関係国の間で非公式に議論を進めました。結局、予算シーリングについては、米国脱退の効力が発生する２０２７年以降は米国分を除く形で設定し、また、インフレ要因は予算の上乗せでなく合理化努力で吸収する形（前会計年度と予算の名目値を同水準に設定するため、ZNG (Zero Nominal Growth) といいます）で決着しました。予算減額のショックを緩和するため、積立金の一部を取り崩して活用することも合意しました。

（今次執行委員会の締めくくり）

執行委員国の任期は４年、約半数が２年ごとのユネスコ総会で改選されるため、現在の構成メンバーでの執行委員会は今回で最後になります。２年間議長を務めたベラ・ラコユ議長も今回で退任です。執行委員会最終日の１６日の締めくくりには、各国代表から同議長、同じく２年の任期を終えて退任するシモーナ・ミクレスク総会議長、そして８年の任期を終えるアズレー事務局長に対する賛辞のステートメントが相次いでなされました。



退任するラコイユ執行委員会議長（出典：ユネスコ）

私がパリに着任したのは、一昨年の年末でしたので、昨年及び本年の春と秋の通常会合、及び昨年秋にガザのUNRWAの活動を巡って開催された特別会合と、現在の構成メンバーとともに計5回の会合に出席したことになります。ユネスコの活動全般への理解を深め、また各議題毎の各国の微妙な立ち位置について体感できたことで、貴重な経験となりました。

来月のユネスコ総会での選挙を経て、執行委員会も構成メンバーが入れ替わります。事務局長、執行委議長、総会議長も一新し、ユネスコは新たな体制で直面する課題に対処していくことになります。



ユネスコ執行委員会メンバー

最後までお読み頂き、ありがとうございました。

次回のパリだよりをお楽しみに。

ユネスコ日本政府代表部大使

加納雄大